

日本の遺書

大宅壯一著

入宅壯一著

日本の遺書

日本の遺書

所
有



版
權

昭和二十五年五月十五日印刷
昭和二十五年五月二十日發行

定價一八〇圓
二〇圓

著者 大宅壯一
發行者 二木秀雄

東京都中央區銀座七の三

發行所 株式會社
ジープ社

電話銀座 (57) 三二六八
振替東京一九五一〇九

印刷所 光正堂印刷株式會社

序

文

阿	後	馬	尾	吉
部	藤	場	崎	川
眞	隆	恒	士	英
之	之	吾	郎	治
助	助			

「日本の遺書」に寄す

吉 川 英 治

きょうの日本は、きのうの日本ではない。きのうの日本を読み知るには、余りに膨大で亂脈で複雑怪奇で、なおまだ、歴史として、適當なる整理もついていない有様だ。記録文學の簇出などは、むしろなおさら吾人にそれを讀史する混亂を加えていると云つていい。

だが、ここに一冊の背皮天金上質ウス紙製のノーブルな掌中昭和辭典がある。戦前戦後に亘る日本の昭和荒國史、敗戦裏面史の機微は、總てこの上品な洋皮表紙の小型辭典の一冊から引出せようというものである。これが人間近衛文麿だと私は思っている。

かれを悲劇の主人公とよび、敗戦日本のシンボルといい、人は一應、その數奇と宿命をあわれみながらも、實はこの掌中辭典をまだそうつぶさには索引していない。軍部のロボットというだけの粗雑な概念の中に置き去られている。つい、きのうの荒國敗土の真相が、いまなお明確に讀史し得ない理由のひとつはこれだと思う。

それを今、はしなくも思わざる作家が、思わざる觸手をうごかして、この「近衛索引」に指

を染めた。時々、シンラツな匿名批評にちらちら影を見せるほかは、めつたに真正面の自分を誇示しないし、また實際に無性者で、太々しくせにハニカミ屋で、思想ははつきりしているが、由來、人間的には三國志の猪八戒みたいな存在に思われていた（ひとは知らないが自分は）大宅壯一氏がこの世紀的な題材に取ツ組んだというのである。ほんとかい？と私は初め編輯者に半ば笑いながら云つたくらいだった。が、いま、氏の推敲苦心の勞積百余枚の原稿を、實際に見せつけられ、かつその史料の蒐集やこの數旬にわたる大宅氏の没頭ぶりを聞いて、この大題材と、この寡作な作家との配遇を、私は手を打つて愉快におもつた。かつて徳富蘇峰翁がジャーナリストの王座にあつた頃、その虎威を揶喻して翁からは一代の怒怨をうけたといわれるが、洛陽の酒友にかこまれては、へらくとよだれを垂れて一笑していたこの人が、近衛索引をひいて、どこまで近代日本危篤史を小説化した臨床報告をもたらずか、また文藝人としての人間近衛像を描きあげるか、私は、非常なたのしみだ。私はこの地球表面がなお、五風十雨を過ぎきれない颱風期とおもっているのだ、ひとり日本の藝苑文壇のみが、花らんまんたるルネッサンスを咲かせようなどという甘い夢はもつていないが、この變わり種だけは、きつと異色ある、そして意味ふかい一花を咲かせるだろうという氣がしている。

「日本の遺書」推讃

尾崎士郎

予は病臥中、この作品を原稿で讀み、讀みながら惻々肺肝をえぐるがごとき昂奮を覺えた。記録が正確であることよりも、むしろ筆者の人間解釋が正しい批判の上に成り立つてゐるからであらう。大いなる時代の犠牲でもあれば、運命の子でもあつた人間近衛公の人間像を生けるがごとくに描きだした大宅君の功績は、單なる文學作品としてではなく、苦悶と動搖の中に、自ら意識しながら敗戦の現實に直面すべく餘儀なくされた民族の悲劇的運命を冷酷無殘に掘り下げたところにある。近頃、終戦當時の回顧録が次々と公刊されている模様であるが、今日行ふべくして、しかもこれほど至難な仕事はないであらう。明徹なる時代批判と、犀利なる人間解剖と、これに隨伴する逞しき表現力を俟つてはじめて爲し得るのである。その意味において大宅君は當代の第一人者と言えるかも知れぬ。小器用な技巧をいささかも持ち合せていないことにおいて、彼は昔から野臈紛々たる男であつたが、この素材と取組むことにおいて、彼の表現力は、ついに縦横無礙なる威力を發揮してきた。特に時間的に連續する時代の起伏を、人間

心理の推移の中に把握した的確さは絶讃に値する。

「日本の遺書」を讀す

馬 場 恒 吾

最近の傾向として、センセーショナルな題目の記録文學が簇出しているようであるが、そのほとんどが戦時中の裏面暴露か、或は敗戦記録を取扱つたもので、中には我々の關心を呼び起すに足るものもないではないが、大方は経験記録の羅列に終るか、或は、皮相な觀察に基づく軽い讀物風のものが多いようで、眞に讀者の肺腑に喰い込んで來るような作品が見受けられない。大宅君の「日本の遺書」は異色ある記録文學であり、資料の蒐集に異常の努力が拂われており、而して人間近衛像を如實に、且つ判明に描き出している點に深い感銘を受けた。

日本の封建と權力に對して拮抗しようとし、果し得なかつたところに、主人公としての彼の悲劇があつた。かくして、永久に地上から消えて行つた近衛の悲劇は、封建日本の悲劇であり、梵鐘であり、葬送曲でもあり、自由日本人への警鐘でもある。大宅君のこの仕事は同君にとつ

て、畢生の大事業であり、記録的な大作である。前編の興味的な段階から、果して如何に發展して行か、續篇に對する私の期待は大きい。

離れて見る富士の山

後 藤 隆 之 助

近衛さんが逝かれてから、最早足かけ五年になる譯だが、月日の立つのが近頃餘りに早い様に思われる。

昭和二十年十二月十四日近衛さんから使があつたので訪ねて見ると「支那事變以來今日迄自分のして來た事は總て事志と違つて失敗に終り今日に及んだ事は如何にも残念だ。今度はニユースバリュのある大物主義で行くから極刑にはなるまいが重刑は免れまいと思う。自分のこれ迄やつて來た事は失敗に終つたけれど、自分の志す所は別にあつたと云う事を後日天下に明かにして貰いたい。その事を頼んで置きたいと思つて今日は來て貰つた」云々と語られたが、今日から考えて見るとそれは私に残された遺言であつた。

其の翌日、近衛さんが愈々巢鴨行を拒んでいられるときいて扱てはと思つて夕方荻外莊に行

つて見ると、既に懇意な人々が大勢集まつて三々五々密かに事の成行等に就いて言葉が交わされていた。丁度その情景はお通夜の晩の様でもあつたが然し和やかなそれらしくもない空氣が何處となくただよつていた。

それから大分立つてから、山本有三君と話合のうえ近衛さんの居間に行つて待つて居ると、醫者が歸られたと云つて近衛さんが出て來られたので、早速「どうするのか」と尋ねた所、果して裁判を拒否する意志である事がはつきり判つた。私は政治家たる近衛公のとるべき道は、ベタン元帥の如く法廷に立つてその所信を述べて裁きを受くべきではないかと勸めて見たが、其の信念は牢乎不動のものであつた。近衛さんの消極的強さは他の追隨を許さぬ天下一品のものであつたが、今度又それが出ていたので、これはもう駄目だと思つた。そこで私は「東條大將の様な見苦しい事のない様に……」と。山本君は「何故死んで行くか、其の理由を明かに書き残してくれ」と頼んでいたが、それに對する答は共になく一切は暗黙の間に明瞭であつた。それから應接間で皆と一緒に話そうではないかと云う近衛さんの言葉に従つて、残つていられた松本君や、牛場君とウキスキーをのみ乍ら暫らく極めて和かな雜談が交わされたが、其の時の近衛さんは平生よりも物靜かな誠に親しみ深い態度で、如何にも樂しそうに私共の話を傾聴していられた。數時間後死んで行く人とは到底想像し得ない風で、牛場君がこれはヒヨツトす

ると明日巢鴨に行かるとではないかなと思われたのも無理からぬ事であつた。然しこれが最後のお別れとなつた。

その晩私は三鷹の山本君の家で待機していたが、翌朝知らせの電話をうけて山本君と一所に行つて見ると近衛さんはもう安らかな大往生を遂げられて立派な光つたような顔をして永眠されていた。山本君は室に這入るや否や泣き聲で「ご立派です」と、くり返し云つていた。前夜東條大將の様な事のない様にと云つたことを恥しく思つた。

曾て原田熊雄氏は「近衛と云う男は富士山の様な男だ。富士山は行つて見ると新聞紙や空カンのちらばつた焼石許りの穢い山だが、一旦離れて見ると實に崇高な山だ。近衛もそれと同様で近づいて見ると欠點だらけの男だが、いざ離れて見るとあれ位氣品の高い男は滅多に見られない。西洋に行つてもあれ丈の風格のある政治家は居ないだろう」と云つていたが、蓋しこれは適評であらう。

二・二六事件直後時局拾収に就いて自信がないと云う理由で西園寺老公と二時間も押問答の末其の懇請を拒けられたが、更に老公が押して推薦されたので大命は降下されたけれど、近衛さんは同様の信念に基づいて拜辭され、それ以來近衛さんは一躍政界の第一人者として認めらるに至つたのである。丁度その頃の事であつたと思うが千代子夫人から「世間では文鷹を偉

い偉いと云うが一體何處が偉いのですか」と問われて返答に窮した事があつた。尙輕井澤で令嬢あき子さんが近衛さんを擁して「このババの何處が偉いのかい」と顔を撫で、その高い鼻を玩ばれ近衛さんも苦笑し乍らなすが儘にされていた事もあつたが、茲で「聖人々と云うから誰の事かと思つたらお隣りの丘の事だそうでないか」と云う孔子の隣の婆さんの言葉が想い出さる。然し近衛さんが一度軍人や政治家等所謂お歴々の集まつた席上に出られると、丁度富士山が群峰の間から抜け出て雲表高く其の雄姿を現わしているが如く光つて見ゆるものがあった。曾て近衛さんは西園寺老公を評して「あれは只の鼠ではない」と云われたが近衛公も亦只の鼠ではなかつた。いか物喰いの好きであつに近衛さんは目ばしい人物を悉くその傘下に迎えられたが、誰でも近衛さんの爲に働く事を悦ばれたのは單に名門の出身であつたが爲のみではなくして其の懇望の爲であつた。要するに近衛さんは無表情な涼しい顔をし乍ら虎や獅子の様な人達をも懷柔して行く事に妙を得た圖太い鼠であつた。

友人大宅君が今度大正昭和の時代を背景として近衛さんを描き出され様としているが、その着想が甚だ面白いし、同君一流の筆致を以てそれは必ず精彩に富んだ近衛さんが描き出さるゝに相違ないと心密かに其の成功を祈つてゐる。

永遠に残る記録文學の至寶

阿 部 眞 之 助

私は以前、近衛文麿を評して、銀座のまん中の土地のようなものだといったことがある。芋や大根を作つたら、田舎の權兵衛が作る土地と格別變わりはないのだが、銀座の位置が彼を高貴のものにしてしまつた。權兵衛は勞働で、からだを押しつぶされ、鋤や鍬で手を豆だらけにしているのに、銀座には勞働がなかつた。逸樂があるばかりだつた。だから近衛は、ひよろと背丈が延びて、手が青白かつた。私たちに無いものはすべて貴い。彼がそれだつた。彼がもし、藤原氏の正系をつく、貴族中の貴族でなかつたら、日本の生死にかかわる一番大切な時期に、一番大切な地位に置かれることはなかつたであらう。他に人が無かつたのではない土地が無かつたのである。これは近衛の悲劇で、また日本の悲劇でもあつた。

近衛を軍國主義者であるというのは、當らないようである。思想的にはむしろ進歩主義的傾向の持主だつたようである。軍人の横暴を、心の中では嫌惡しながら、正面から反抗することもしせず、却つて軍人の捕虜となり、軍人に利用され、遂に國を滅ぼしてしまつた。それは彼の

なまじいの才能と、才能に伴わない不決斷のさせたことで、このことが彼をどんなに苦惱させたかは、死に臨んでの手記をみればよく分る。いかなる苦惱をもつてしても、犯した誤りを償うに足りないことではあるが。

戦争が熄んで、四年以上を経過した。ようやく私たちも虚脱の状態から靜かに過去を反省する時期に達したようである。日本がどうしてこうなつたかを知るには、あらゆる方面に手をとれば探索しなければならない。なかんづく近衛については洗いざらい調べ上げる必要がある。尾籠の表現だが、彼の尻毛の数までも、讀まなければならないのである。戦前から、戦時にかけて、たとえ彼がロボットのであろうとも、とにかくにも主役として働いてきた彼を、知ることはなしに、日本の過去を知ることができないからである。

大宅の「日本の遺書」に、私が特に興味を感じることは、記録の主人公と作者とが、その血統、遺傳、性格、社會的位置等、等、一切合切が、正反對の對照をなしていること、作者と作中の主人公と、人間的にその大きさを拮抗しているという二點であつた。彼の書いた「日本の遺書」は、記録文學の寶として永く残されるであろう。聞くところによると、近衛家において「近衛傳」の編纂中だそうだが、ああいうものの價值は大抵知れたものだ。血が、血管の中を流れている、生きた記録は、大宅壯一によつてのみ語られているのである。

目

次

日本の遺書

序

篇

生

と

死

亡

命

者

一

休

と

道

長

跳

躍

台

道

化

役

者

「九

寸

五

分」

青

春

篇

叛

逆

の

系

譜

青

春

讃

歌

一〇七

三

六

五

三

二

八

三